

人と向き合うということ

看護学校に入学して早1年。実習にも3度行かせていただき、自分に出来ることは何かと自問自答を繰り返し、毎日多くの刺激と学びを得ることができた。

しかし、この1年を振り返ると、私が関心を持って取り組むのはいつも患者さんが日常生活に戻るための支援が主であったように思う。もちろん、全ての患者さんが日常生活に戻れるわけではなく、時には患者さんを看取らなければならない場面があることは重々承知している。しかし、私にはなぜ人が病によって寿命を全うすることなく人生を終えなければいけないのかがまだ理解できず、患者さんの“死”を受け入れられる自信が持てなかった。“死”と向き合うことから避けていたのだ。この考えから、私はホスピスなどで緩和ケア医療に携わる看護師が、何をエネルギーとして日々の看護職や“死”と向き合っているのかについても疑問に思っていた。

そんな時、授業で見たドキュメンタリーより1人の看護師Tさんを知った。Tさんは、ホスピスで師長として末期がんの患者さんを最期の瞬間まで支えている方であった。私はその動画で1番印象に残っている場面が、患者さんを看取った後にナースステーションの裏でひっそりと涙を流し、「よし頑張ろう」と業務に戻るところであった。私はその場面を見て2つ思ったことがある。1つ目は、看護師も1人の人間として表出される感情を抑えなくても良いということだ。心のどこかで看護師は強くなければいけない、泣いてはいけないと考えていたが、決してそうある必要は無く、1人の人として自分を大切にしていけるのだと気づかされた。2つ目は、Tさんと私の“死”に対する考え方や着眼点が全く異なっていたことだ。私が“死”を避けていた理由は、尊い命が失われることは辛いことでしかなかったからだ。しかし、Tさんは悲しみながらも“死”と向き合う辛さで隠れてしまいがちな、その人が人生を全うした軌跡を見ていた。私は、このことから“死”と向き合わず避けることは、結果的にその人の生きた人生からも目を背けてしまうことになるのではないかと考えさせられた。

「終わりはあるってわかっているけど、生きる希望はある。」これはTさんのおっしゃっていた言葉だ。自分に死が近づいていることを知った時、誰もが絶望し、悲観的になってしまうだろう。そんな時に誰かがそばにいて、献身的に支え続けることは、その人がゆっくりと希望や生きる気力を見出していく糧になると私は考える。そして、私は看護師として誰かの支えとなれる存在でありたい。その人にとって悔いのない人生であったと思えるように自分に出来ることには精一杯取り組んでいきたい。

今後、必ず誰かの“死”と向き合わなければならない日が来るだろう。もちろん、それは辛く悲しいことである。しかし、それだけでなくその人が生きた人生にも目をむけ、真正面から向き合い、その人が生きた証を大切にしていこうと胸に誓った。